

文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ 塩屋から志度寺の海岸をたどる

講師 溝渕茂樹（高松市歴史民俗協会理事）

平成22年6月27日（日）

共催 高松市歴史民俗協会  
高松市教育委員会

# 1 塩屋

昔、この付近の海岸は遠浅で、防風林があり、今でもわずかに名残をとどめています。塩屋という地名は昔、この地に塩田があったことから出たもので、塩竈神社しおがまがあり、天保8年（1837）と刻んだ鳥居があります。このころから約4町歩ほどの塩田があり、江戸末期には廃田となっています。

また、志度方面への電車に乗っていると、塩屋駅付近は絶好のビューポイントで、海岸に向かって急カーブにさしかかると、窓一杯の青い海や空が突然目の中に飛び込んできます。



# 2 塩屋海岸

牟礼町の東部、志度湾に面する塩屋海岸は、全長約500メートルの砂浜で、潮干狩りや海岸散歩など、多くの人々に親しまれています。戦後の一時期は市内の屋島



塩屋海岸

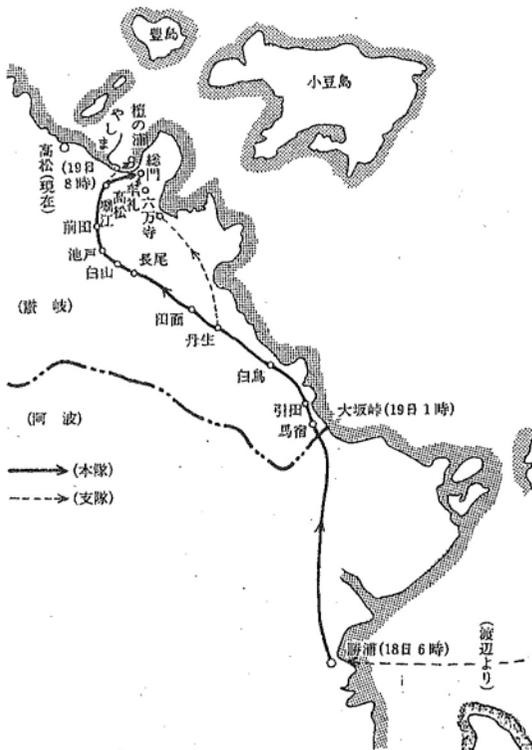
壇の浦や、芝山、さぬき市の志度、津田の松原などとともに、琴電やJRに近い海水浴場としてにぎわいました。

### 3 屋島檀ノ浦の合戦

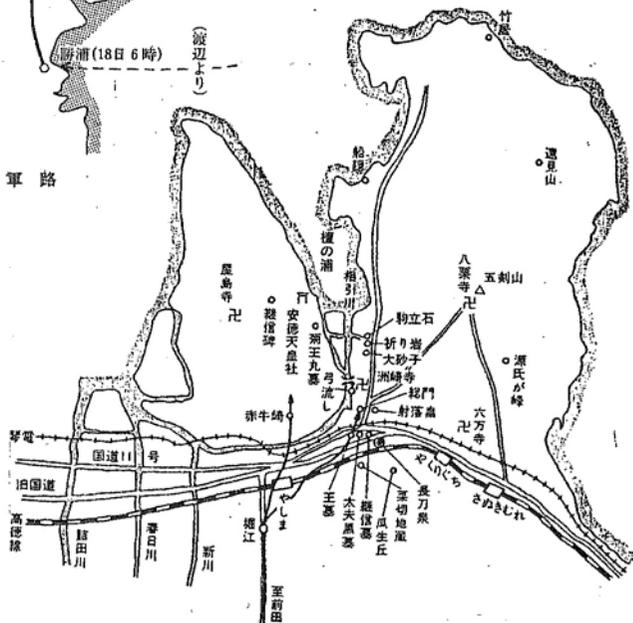
寿永3年(1184)2月、一の谷(神戸市)で破れた平氏は退いて屋島檀ノ浦よに拠りました。

その翌年2月には源義経が平氏追討のために嵐の中を船で阿波の勝浦まで渡海、陸路讃岐に入り、屋島を目指しました。本隊は内陸部、現在の長尾、新田街道方面から、そして支隊が海岸、志度を経て牟礼に入り、19日には平家と対峙して合戦に及びました。義経は檀ノ浦を見下ろす瓜生が丘に陣を構え、一夜兵を休めました。2日目の翌20日も終日合戦となり、夕刻には那須与一が活躍しました。平氏方はこの間に、明日には味方の田口氏の軍勢が伊予から到着することを期待して、義経軍を挟み撃ちにすべく深夜から平氏の軍船をこっそりと志度の浦に移動、21日早朝に上陸を開始しますが、これを知った義経が駆けつけ、平氏は不意を突かれて船に戻りました。この後、平氏は九州へとのがれて行きます。おそらくその地は、牟礼町の志度湾に面した房前の鼻を挟んだ一帯の海岸のどこかであろうと思われます。また、近くの丘に鎮座する幡羅はら八幡宮では、義経らが戦勝祈願

をしたという言い伝えがあります。



源軍進軍路



源平古戦場圖

#### 4

### 塩竈神社

祭神

塩竈塩土老翁

しおがま

しおがましおうちのおじ

牟礼町大町の塩釜神社は、「道の駅源平の里むれ」より北へ歩いて7〜8分の所に祀られています。由緒は不詳ですが、この地は昔、塩田のあったところで、塩田の出来た頃、またはその前後に勧進され、天保8年（1837年）の鳥居があるところから推察してその前後の建立と思われる。



塩 竈 神 社

#### 5 鶴身病院

大正の初期（1912〜）から、昭和20年（1945）の終戦のころまでは、牟礼本町に2つの病院がありました。（川東の鶴身病院・王墓の小松病院）

鶴身病院の初代院長鶴身藤太は九州帝国大学医学部の第一期卒業生で、釜山病院院長として赴任しました。大正元年（1912）帰郷し、琴電塩屋駅北側に総工費1万円、県内では珍しいレントゲンを備えた病院を建設しました。

当時は医師の数も少なく、牟礼村内はもとより、近郷近在から患者が集まり、村内は言うに及ばず、庵治・屋島・志度方面にまで人力車で往診していました。学校医、

漁業組合長、村会議員を長期にわたって務め、町行政に多大な貢献をした鶴身藤太は、昭和21年（1946）8月15日67歳で死亡しました。病院の建物は寄棟屋根、

したみいたばり

（注1）下見板張り、正面側は上げ下げ窓で玄関上にはフアンライトを備えた造りで、医院建築として立派なものでした。今は建具や床が壊れていますが、往時の診察室や病室の間取りはよくわかります。

（注1）下見板張り

外壁施工方法の一つで、平たく長い板状の外装材を横張りする工法です。板の重なる部分を加工して、表面に段差が出ないように張るドイツ下見板張りや、鎧のように板を重ねて張る鎧張り（南京下見板張り）などがあります。

## 6 牟礼道の駅

平成19年に開設。

高松から志度に行く途中に道の駅「源平の里むれ」があります。源平屋島合戦の古戦場として有名な場所に位置し、海を望む風光明媚な場所に設置されています。利用者の憩い



鶴身病院



の場所として道の駅の隣に公園を設けるなど、家族で楽しめる場所となっています。また庵治石で造られた郷土出身の川島猛氏の石のモニュメントなども展示しています。

ここには琴電志度線で使われていた旧車両335号が保存されています。電車は中にも入ることができ、運転席にも座れます。この車両は大正15年（1926）のもので、リベットが打ち込まれ

た外装にパンタグラフの台が木製で、レトロな懐かしい車両です。平成18年（2006）12月に引退するまで80年間活躍していました。平成19年（2007）1月に高松琴平電気鉄道から寄贈され、この場所に展示されています。



## 7 房前ふさ さき

この地名は、平安時代に権勢をふるった藤原氏淡海公（藤原不平等）の一子房前大臣に縁があるといえます。志度寺のおこりを描いた絵巻「志度寺縁起」によると、天武天皇7

年（678）藤原不比等が父鎌足の法要を営んだ際、唐の高宗帝の後妃になった不比等の妹が、父の追福のため日本に送った「面向不背の玉」を唐の使が台風のため志度湾に沈めてしまいました。そこで不比等は名を変えてこの地に来て海女と結婚し、一子をもうけました。この時、この浦を房前といたので、その子は後に房前の子と呼ばれるようになりました。房前の母の海女は、この玉を探しあてて真珠島にあげましたが、遂に死亡してしまいました。不比等は妻を志度寺に葬り、後に成人した房前は寺を改造し、法華經十巻を書き写して母の冥福を祈ったと言われています。

いわゆる謡曲「海女の玉取り」の元になる伝説ですが、正史には載っていません。また、寒川村にあった極楽寺の歴史を書いた「宝蔵院古曆記」には菅公が九州に左遷されたとき、海路の途中房前の浦で、鴨部にあった極楽寺の僧明印が、小船に乗って菅公に面会したということが記載されています。

## 8 謡曲「海人」<sup>あま</sup>と海女の墓

海女（海士、海人）の玉取り伝説と女人成仏を主題とした物語として有名な名曲です。

内容は、藤原不比等の子である房前は生母が讃岐志度の浦の海士（海女）であることを知り、志度の地を訪れます。房前はそこで出会った海士から、かつて夫から「奪われた面向

不背の玉を竜宮から取り返したならば、二人の間に生まれた子を世嗣にするとの約束の下に海底に潜り、玉を取り返して命を失った。自分は房前の母の亡霊である」と、自分の生誕に関わる玉取りの話を聞きます。そして我が子、房前の追善の読経により成仏した海士は、竜女の姿となって現れ、早舞を舞ってその孝養を称えます。

言い伝えの一つでは、房前は僧行基とともに本堂を再建し、千基の石塔や法華経を納めた経塚を建立して供養を営み、また海女の縁としてこの地を「玉の浦」と呼んだといえます。現在志度寺の西側にある「海女の墓」がこれだと言われています。房前は、飛鳥く奈良時代初めの人で、後の藤原氏全盛時代を築き上げた藤原北家の祖であり、志度と藤原氏の関係の深さを示しているのかもしれません。

## 9 牟礼港（県管理地方港湾）

古い歴史を持つ港で、砂糖、米、塩の積み出し等が行なわれました。明治に入ってから背後で良質の粘土が産出したことから、港周辺は窯業の町と一変し、港は煙突で取り囲まれるほどとなり、浜には土管、レンガ、コンロ等が並び、（注2）機帆船が



海女の墓と経塚

これらの製品を各地に運んでいました。窯業も昭和40年（1965）頃から衰退し、変わってコンクリート製品化が進んだため、港湾貨物は砂、砂利に変わりました。しかし自動車運送の発達により、時間的早さ、利便性から海上運送は少なくなり、今はその姿を見なくなりました。

### （注2）機帆船

推進用の動力として熱機関を併用した帆船で、日本語で狭義に「機帆船」という場合は、外洋航路への無帆装の蒸気船の普及後に、沿岸航路の海運に用い続けられた内燃機関搭載の木造船を指します。

## 10 志度湾

西を庵治半島、東を大串半島に囲まれた海域。さぬき市志度と高松市牟礼町、庵治町にまたがっています。深い入り江となり天然の良港であり、志度港、牟礼港をはじめ庵治町篠尾、牟礼町房前、志度の小方、室沖などの漁港が発達しています。湾奥には、志度浦とか玉の浦と呼ばれた志度地区があり、今ではカキ、ノリなどの養殖漁業が盛んです。東部の埋立地には臨海工業団地が形成され、多田野鉄工、南海プライウッドなどの企業が進出しています。志度湾は寿永4年（元暦2年1185）源平の讃岐での最後の戦いの舞台、

さらには大串半島の幕末の砲台跡など歴史と伝説の宝庫です。玉の浦の名も「海女の玉取り伝説」に由来すると言われています。志度湾一帯には、四国霊場第86番札所志度寺をはじめ平賀源内記念館、竹林上人廟、多和神社、四国霊場第85番札所八栗寺など多くの観光・文化遺産があり、屋島、五剣山の秀麗な山容とともに脚光を浴びています。

## 11 愛染寺

本尊 愛染明王

高野山の僧で、「四国遍路道指南」をつくり、八十八箇所霊場を整備したという江戸時代の真念ゆかりの寺(真念はここで亡くなりました)でもあります。真念が延宝・天和年間(1673〜1684)に作った道標が瀬戸内海歴史民俗資料館にあります。

洲崎寺蔵の「御領分中寺々由来の書」によれば、「一、開基知不申候、

寛永元年(1624)諸旦那以助成再興仕申候事」となっています。もと原浜(現在の原浜公民館あたり)にあつて松面山と称しました。明治の廃仏稀釈で廃寺となったものを後年尼寺として再興しましたが、昭和53年(1978)に先代住職菓本信照尼が亡くなり、



八栗寺



志度寺 大師堂

後は無住となって建物は荒れ果てていました。

寺は幡羅八幡神社鎮守の森のそばにありましたが、道路拡張工事のため立ち退きをせまられていました。無住ということもあり立ち退きは難航しましたが、地元の人たちが六万寺住職の今雪真善師に住職就任をお願いし、住職を引き受けた今雪氏を中心として、愛染寺の再興が図られました。地域の人々の寄進やボランティアの力によって、平成20年(2008)新たな地(ことでん房前駅前)に「地域の人の交流の拠点」に主眼を置いた斬新な造りのお寺が落慶しています。

## 12 東林寺

浄土宗四国四ヶ寺の一つ。

多和神社の山道の西側に位置します。延宝4年(1676)高松藩主松平頼重の建立。

元は仏生山法然寺の下寺で、松平家の仏事(成願寺で開催)に出勤が義務付けられた寺です。門前には、平賀源内の俳諧の師である渡辺桃源の辞世の句「露と散るこの身は草に置かねども」を掘り込んだ露塚があります。

## 13 多和神社

祭神

速秋津姫命

はやあきつひめのみこと

延喜式内讃岐国二十四社（注3）式内社）の一社で讃岐国三の宮と言われています。志度駅の約1キロメートル西、国道南側の山腹に多和神社の鳥居があります。鳥居から参道の石段をのぼると志度の町並みが一望できます。神域面積は2万1千平方メートルに及び、深い緑の自然が残っています。参道を進むと、神門があり、神門から階段を登ると境内に至ります。創祀年代は不詳で、神代に祭神・速秋津姫命が多和郷に来て鎮座したものを、後世になって郷名から多和神社と称したと言われています。

江戸時代初期までは、四国86番札所志度寺の傍らに鎮座していましたが、戦国時代の文明11年（1479）焼失し、初代高松藩主松平頼重により志度寺が復興されると、多和神社も復興され、現在地に移転しました。また、神社境内には「多和文庫」があり、幕末から明治にかけて国学者・神官として各所で活躍した同神社祠官（注4）松岡調みづくが生涯をかけて収集した神道、国史、国文、郷土史、考古学、書画骨董の各方面にわたる貴重な文献・資料を所蔵しています。

（注3）式内社

醍醐天皇の命で平安時代の延長5年（927）に完成した『延喜式』神名帳に記載され、朝廷から官社として認識されていた神社のことで、全国に2,861社あり、うち2,381社が各国司によって祭られ、当時から地方の名社として崇敬されていました。

讚岐国には二十四社があり、この多和神社がその一つとする説があります。他にも長尾町や津田町にある神社と考える説もあります。一の宮、二の宮、三の宮、他二十一社と順番に格付けされ、三の宮とされた多和神社は讚岐で3番目に格式の高い神社とされています。

\*一の宮（高松市一宮町 田村神社） 二の宮（三豊市高瀬町 大水<sup>おおみな</sup>上<sup>かみ</sup>神社）  
（注4）松岡 調

江戸後期<sup>ともやすみふゆ</sup>明治時代の国学者。文政13年（1830）生。讚岐高松藩士佐野正長の子で友安三冬に学びました。松岡寛房の養子となり、多和神社祠官。維新後、藩の皇学寮督学、兵庫県の伊和神社宮司などをつとめ、古典の考証、古器鑑定にすぐれていました。明治37年（1904）12月75歳で没しました。別名に信正<sup>はるとき</sup>、春禊、御調、号は香木舎、著作に「年々日記」「斉明紀童謡弁」などがあります。

## 14 用心堀石灯籠

平賀源内ゆかりの遺構の一つです。平賀源内旧邸より西へ100メートル程のところ<sup>むらむら</sup>に、高さ約4メートルの石灯籠があります。台石の東面に「用心堀御蔵懸り邸々」と刻んであり、米蔵を守る防犯灯の役割を果していました。

この石灯籠は、嘉永4年（1851）津田村大庄屋の上野氏と志度村庄屋の岡田氏が、お蔵の用心のため建てたものです。上野、岡田両家ともお蔵番であった平賀家の親戚でした。また、高松藩松平家が、領内の百姓からの年貢米を収納するため、藩内各所に建てた米庫の一つがここにあつて、志度のお蔵と呼ばれていました。約5、600平方メートルの敷地の周囲には竹藪、その外に堀が巡らされ、9メートル×27メートルの蔵が3棟と年貢米検査所、藩役人や蔵番の部屋があり、毎年秋15、000俵の米が収納されていました。

## 15 志度のお蔵番

志度の米蔵に米を納める地域は、寒川郡の約半分と三木郡の原、大町、牟礼、井上の各村でした。明暦3年（1657）当時牟礼町に住んでいた白石喜左衛門良盛（平賀家は当時白石と称していました）を召し出して志度の米蔵番に任命、以後4代98年間その役を平賀家が務めました。源内は、父良房の死により後役となりましたが、宝暦4年（1754）7月学問をめざして退役しました。



用心堀石灯籠

「平賀氏由来之事

平賀喜左衛門国行は先祖平賀三郎国綱七世孫也。国綱子を平賀二郎国宗奥州白石に居住して、是より家号を白石と号す。国之曾祖父を平賀彦岐守国長号すは真洲にて武田信玄討絶平賀源心子也。国長長子を平賀内記国光と云、国光子を国家と云、伊達陸奥守宗頼公に仕へて白石に居住して、宗頼公三男遠江守宗利は伊予国下向之時、国家も老臣として伊予国宇和島へ下向して、正保三戌年三月十五日七十五にて卒す。其子を白石十郎兵衛国行と号す。阿部清兵衛とは相役也しを、忒人を、朋友臣より讒言して阿部清兵衛は切腹す。白石十郎兵衛は讃岐国寒川郡小田浦へ流給、夫より名替えて喜左衛門と号して土民となれり。夫より牟礼村へ参る。天和二戌正月六日八十五にて記付申候。国綱先祖有時之先祖之家号。国倫（花押）国倫＝平賀源内

平賀家は承応2年（1653）より牟礼に住居を構えており、志度に移り住んだのは延享2年（1745）源内18歳の時でした。

16 石鎚山奉納灯籠

『自然石を使ったこのユニークな灯籠は、志度町間川、雲附山に祀られている石鎚神社の奉獻と、志度の海辺から



石鎚山奉納灯籠

玉浦川の河口にかけて繫留する漁船のしるべのため、もとや醤油初代の当主小倉嘉平が、石鎚神社の信仰に燃える実弟、高松藩士田山助蔵のすすめによって、弘化3年（1846年）に建立したものである。小倉嘉平を中心にはじま

た石鎚講は、間川を中心にいまもつづいている。』

【さぬき市・さぬき市観光協会 看板】

## 17 種田山頭火の句碑

「そのかみのおもいで海にかえりて」

俳人 山口県生まれ（1882～1940）。荻原井泉水の門下となります。雲水姿で西日本を中心に旅し句作を行ないました。松山市に移住し「一草庵」を結び、この庵で生涯を閉じます。享年57歳。自由律俳句の代表として、同じ井泉水門下の尾崎放哉と並び称されましたが、ともに酒癖によって身を持ち崩し、支持者の援助によって生計を立てていたところが似ています。その作風は対照的で、「静」の放哉に対し山頭火の句は「動」で、志度寺境内本堂前にも「月の黒鯛ぴんぴんはねるよ」の石碑があります。



山頭火 句碑

## 18

地藏寺（魚霊堂）うおみどう 本尊 文殊菩薩

『四国八十八箇所八十六番札所志度寺』奥の院 真言宗  
 景行天皇23年、土佐の海に棲んでいた怪魚が瀬戸内海  
 にはいりこみ神出鬼没、時には海岸にまで押しよせて悪事  
 を働いた。天皇は心配して、日本武尊の御子、靈子に討伐  
 を命令した。悪魚退治に成功した靈子は、褒美として讃岐  
 一国を貰い受け国司となり、里人から讃留靈王(さるれお  
 う)と呼ばれた。後に悪魚のたたりを恐れた里人はお堂を建  
 て、地藏菩薩を安置したのがこの地藏寺(魚靈堂)だと伝え  
 られる。本堂には文殊菩薩を安置し、脇には文殊の化身、  
 当山開基菌子尼、將軍地藏など諸国古跡の本尊六十六部の  
 仏像が並んでいる。また、境内  
 の表の東、西には名物「夫婦柏」がある。以下略【寺の紹介看板】

讃留靈王の名は丸亀市(旧綾歌郡飯山町法勲寺)の古代の寺院跡である法勲寺横にある  
 讃留靈王神社(祭神 武彘王)たけひこおうにも伝わっており、その墓というところが陶の猿王など何  
 ケ所かあります。



地 藏 寺

## 19 源内記念館

平成21年(2009)3月22日オープンしました。

元百十四銀行志度支店の跡地に敷地面積1,100㎡建物2階建、延べ床面積470㎡で旧邸からも近く、志度寺の門前町として形成された商店街の中心にあります。

江戸文化が花開いた江戸時代後半(享保〜安永)に流星のごとく現われて、豊かな独創と多彩な能力を駆使し、新しい時代を開いた平賀源内。発明家、本草家、美術家、作家、鉤山家として活躍し、奔放に人生を疾走しながら、日本全国にその足跡を残した平賀源内のゆかりの品々を展示しています。外観は源内が生きた江戸時代をイメージし、1階部分は源内の発明品などを展示、また「歩く」をコンセプトにまとめ、「志度・高松」〜「長崎」〜「伊豆・秩父・秋田」〜「江戸」と各地の足跡をたどることが出来ます。2階部分は子供たちの体験学習の場として活用されるよう設計されています。また、記念館の入場券で平賀源内旧邸と薬草園の見学もできます。

【参考文献】

『牟礼町史』平成5年3月20日発行 牟礼町史編集委員会

『『日本名所風俗図会 1 四国の巻』昭和五十六年十二月三十日発行 (株)角川書店

『文化サロン源内 Vol.1』平成21年3月発行

『道の駅 源平の里むれ ホームページ』



平賀源内 旧邸



平賀源内記念館